

「気がつけば親父とそっくりに」

アルコール依存症を病んだ戦場写真家

映画・医療ライター こもり 小守ケイ

「もう酒は終わり。来週はシラフで家族と会うのです」。居酒屋で大酒を飲んだ上にウオッカやウイスキーを買って帰った塚原安行は、独り言を言いながら“最後のウオッカ1杯”を飲んで床に就く。しかし気がつくとし禁し、駆け込んだトイレで激しく吐血。真っ赤に染まった便器の脇に倒れてしまう。

母の通報で救急車が来た頃、元妻で人気漫画家の園田由紀一酔った彼の暴言や暴力のせいで離婚したが、二人の子供と近くに住み今も何かと世話を焼く一が駆けつける。「ごめん、またやっちゃったよ。」由紀は落ち着いて「大丈夫、まだ死なないよ」と彼の頬をさする。それは10回目の吐血だった。

原作は漫画家の西原恵理子の亡夫の戦場写真家、鴨志田穰（1964～2007）の自伝的小説。アルコール依存症の主人公と支え続けた家族の日々を描く。主演はトップスターの浅野忠信（安行）と永作博美（由紀）。ベテラン東陽一監督作品。

「奈良漬か、酒じゃないから大丈夫」

搬送先の病院。出血源は肝硬変が原因の食道静脈瘤破裂。緊急の内視鏡手術で大出血も止まり、安行は辛うじて危篤を脱した。

「お父ちゃん！」3日後、意識が戻ると由紀と

子供達が見舞いに来る。付き添っていた母が由紀に肝機能の γ （ガンマ）-GTP*が1800で重態だと告げると、さすがの安行も「酒は止める」。早速由紀は専門医を手配する。

退院後、精神科専門医を受診した安行は、通院で抗酒剤治療を始める。しかし、寿司屋で出た奈良漬を口にすると、そのままコンビニでウオッカとビールを買って飲み、酔っ払って転倒。頭を触ってみると血が流れていた。

断酒後の離脱症状を仲間と共に治療

「入院するのよ」。母に伴われて精神病院アルコール病棟へ。女性の主治医は酒で障害された脳のCTや食道静

脈瘤破裂などのデータを示し、「ひどいもんやね〜。何でここまで飲んだの?」。安行は医師の気さくな態度に安らぎを感じた。

病棟の患者仲間は約15名の男達。集団断酒療法の下、自治会を営み、役割を分担して自主的断酒を目指す。安行は食事係だが、皆にカレーライスを配っても自分にはいつも“香辛料禁食”のお粥なのが気に入らない。その不満が離脱症状の幻覚を起し、突然「俺にもカレーを喰わせろ!」と怒鳴っては次の瞬間には「僕、今、何か言いました?」。また、診察中や入浴中にはアルコール性てんかんで失神する。



© 2010 シグロ/バップ/ビターズ・エンド
発売元：株式会社バップ
写真：子供達と浜辺を歩く安行と由紀

*：アルコール性肝障害の指標となる肝機能検査。正常値は80未満。

映画「酔いがさめたらうちに帰ろう」

東陽一 監督、2007年、日本

家族に対するケアも重要

1時間の外出許可で蕎麦屋に行った日。「退院したら君たちの所に帰りたい」。由紀は答えに詰るも子供達の「僕達、家族だよ」に背中を押され、安行を受け入れる覚悟を固める。

やがてカレーも解禁され、退院が近いことが告げられる。そして、退院前の仲間の前での体験発表—「酒を飲んで母に暴力をふるう父が嫌だったのに、自分もそっくりに…」。断酒療法で自分と向き合った彼はその全てを語り、アルコール依存症を克服していく。

ラストは家族が浜辺で和やかに戯れる場面。家族の支えで病気が回復したことを示唆する美

しい光景だが、長年の大量飲酒で体力が衰えた安行は42歳で癌死する。父を嫌いながら同じくアルコール依存症を病んだ悲劇は、ケアが患者だけではなく、家族、特に成長期の子供にも必要なことを示している。



“アルコール依存症は病気”との認識が治療の鍵

日本では飲酒人口約6000万人のうち4%の約230万人がアルコール依存症といわれている。アルコール依存症には目が覚めている間は飲むことだけを考え続け、飲まないつもりでも飲み、飲酒量をコントロールできないという精神的依存がみられる。その結果、患者は過量の飲酒を続け、家庭や職場で暴言、乱暴行為、遅刻、欠勤など飲酒トラブルにより孤立する。同時に肝障害、膵炎、糖尿病や手の震え、記憶障害、失見当識などの症状が起きる。

飲酒を止めると身体的依存である離脱症状（禁断症状）が出現する。断酒の数時間後から手の震え、発汗、不眠、吐き気などの早期離脱症状が起き、数日後からは幻視、幻覚、アルコール性てんかんによる意識消失発作、日付や時間が分からないなどの後期離脱症状がみられる。

治療は断酒だが、患者の“自分は病気である”という認識が前提になる。断酒は一人では困難なので、断酒会への参加や入院での集団治療が効果的とされる。断酒できていても再飲酒で容易に再発するので十分なケアが必要だ。家族にも大きなストレスがかかり、親がアルコール依存症なら子の4人に一人は依存症になるので、家族全員へのケアも重要である。

監修

結核予防会 新山手病院
生活習慣病センター長

みやざき しげる
宮崎 滋